聖冏教学における無生而生の論理

服部淳一

聖冏は『釈浄土二蔵義』において「無生之人以二無生解一而得二往生一此即無生而生之義　見生之人以二見生心一而得二往生一此即生即無生之義」として無生而生、生即無生の義をあらわしている。この無生は曇鸞が『往生論註』に展開しているものである。

無生而生について聖冏は『教相十八通』に「於二浄土門行人中一有下観二達生即無生一之者上」とある「観達する者」が「無生の人」に相当させていると考えられるが、見生の心による凡夫ではなく、上根、聖者の分類に入る者と見ることが出来る。無生の解とは凡夫の分別智によっては観達しえない、聖冏の示す発迹入源門、入一法句の世界を解という形であらわしているものであり、曇鸞の三種二十九句の観法による無生であると考えられる。聖冏は浄土の教えを実義と教相に分けているが、『釈浄土二蔵義』に「実義者第一義諦妙境界相　第一義諦　即是実相妙境界相　即是法身　言二法身一者即是平等言二平等一者是無差別　無差別者即是無相　無相　而相　即是自然虚無之身無極之体」とあり、教えの基になるものが平等法身であり、無相而相であると述べている。この理による実義を聖冏は『釈浄土二蔵義』に「教門一往日亦非レ無二差別一所レ謂於二彼土一有二三輩一有二九品一有二五乗一有二三賢一有二十地一有二等覚一依二実義一則無二如レ是諸位一」とし、無輩品などの形であらわしている。

この無生而生に対して曇鸞は見生無生を説いているわけであるが、聖冏は生即無生、あるいは『釈浄土二蔵義』に「不レ改二往生一見一当体即無生」とあるのが見生無生である。無生而生においては無生の解はよるとあったのに対し、見生無生では見生の心とし、解と心としている。見生の心とは曇鸞の見生の願心、但だ仏名を称する力を以つて往生の心を作して、彼の土に生ぜんと願ずる心であることは言うまでもない。この願心も聖冏は『二蔵義見聞』に「見生願心直証二無生一是亦即相不思議願力無生浄土徳也」とあるように、無生浄土における仏の本願力の裏付けによることをあらわしている。

又、『教相十八通』に「往生浄土者往生即是無生異称　言二浄土一者第一義諦妙境界相次於無為泥洹之道　則知実相名号往生浄土言異意同　歟」、あるいは「無生者即是涅槃也涅槃者即是不生不滅也」といい、往生と無生と涅槃とは同一のものであると解釈している。無生と往生の関係については『釈浄土二蔵義』に「如来説二不思議智乃至最上勝智一論主判二第一義諦妙境果相一玄忠釈二相好荘厳即是法身一光明述二浄土無生亦無別究竟解脱金剛身一若解二此意一或現世証二無生一或即身得二往生一何況順次得脱　乎但是猶無生而生修行　未二曾見生無生実義一」とし、無生を解すことが出来れば現世往生、即身往生の可能性があることを示しているわけであるが、この現世往生は『二蔵義見聞』に「或現世証無生者韋提夫人五百侍女幷龍樹天親一家高祖等也」とその例を韋提希夫人と浄土列祖に求め、即身往生は「或即身得往生者西天阿私哆王子中天乾利波羅門等一百九十五人也此即身往生五天往生験記見」としている。韋提希夫人の現世往生については『教相十八通』に「在世韋提希夫人因二事相観心一直得二

無生忍」とあり、この無生忍は善導の『観経疏』に説く華座観の初めに於いて、無量寿仏を見奉る時、無生の益を得たことによって、現世往生があることを示している。聖岡が現世往生を述べたことは『教相十八通』に「垢凡女質相応セル事観修行スレトモ仏力冥加シテ得深位無生最即相不退教門理事縦横操也」とし、即相不退による無生への教門をあらわしたものであり、『教相十八通』に「聖道頓頓悟頓　故直成頓也　浄土頓頓生頓　故隔時頓也」と浄土の頓は往生の時において隔時であるとしているが、その例として韋提希夫人の得無生忍をあげ、隔時という非難に対しているが聖岡においては宗義の前提として彼土の生、順次往生があったと考えられる。しかも『浄土述聞追加口決鈔』に「如吾此宗機有上下若於上機現契此理若於下機雖不解会但以見生心直得無生悟能生凡夫雖不知之事理法体自本融通」とあり、無生而生の理を現世において悟る機根を上機、見生無生によるものを下機とし、下機を凡夫としている。ここに「直ちに」とあるが、これは『教相十八通』に「浄土頓教由一形十念功即証無生」とある「一形十念の功によって直ちに」と理解することが出来よう。

この無生について曇鸞は『論註』において「第一義諦者仏因縁法也此諦是境義是故荘厳等十六句称為妙境界相此義至入一法句文当更解釈」（中略）明下彼浄土是阿弥陀如来清浄本願無生生非也如三有虚妄生也何以言之夫法性清浄畢竟無生」とし、更に「問曰上言知生無生当是上品生者若下下品人乗十念往生豈非取実生耶但取実生即堕二執一恐不得往生二恐更生生惑答譬如浄摩尼珠置之濁水水即清浄上（中略）彼下品人雖不知法性無生但以称仏名力作往生意願レ生彼土」とし、彼土において本願力による無生をあらわしていると考えられる。聖岡もこの説によったことは明らかである。又、『教相十八通』に「若単直愚癡人疑惑亦無也只心存助給口唱南無阿弥陀仏之計也是云単直仰信正機」とあり、「単信大信者不識本願真実不知名号大利不分安心起行」とある単信の大信の人こそ浄土宗第一の機であるといっているのであるから、下品の機こそ見生無生であり、聖岡の説かんとした当機であったことは言うまでもない。

聖岡が無生而生と見生無生の論理を曇鸞の説に基づいて展開したのは、『釈浄土二蔵義』に「夫不レ改凡夫実我実法往生見直契当無生本分智不レ捨衆生虚妄虚偽乱想念速帰入涅槃常楽理偏酬法蔵因願亦依弥陀果徳斯乃四智所成深理也」とある見生無生において、その深理である無生涅槃の理を無生而生によってあらわし、同じく『釈浄土二蔵義』に「如来開名号所具五智説此名仏智論主釈願往生信号如実修行玄忠判レ之云実相身光明挙レ之云仏密意高祖上人講此義立他力実体此則弘願本拠浄土秘懐」と浄土列祖の仏智の取扱いを阿弥陀仏の本願力の本源的な力用としている仏意不思議の教門、理事縦横として相承してきていることをあらわしているものと考えられる。

聖岡のいうところの本願的力用は、『二蔵義見聞』に「今此即相教門仏意之前一相無相之理性　機情之面実生見生之事相也」といっている一相無相の理性、即ち曇鸞のいう入一法句、第一義諦、平等法身の無生而生であり、対凡夫としては見生無生という形であらわしているものということが出来る。（註は略す）

（大正大学総合仏教研究所研究員）